

蛇の卵

そしたらね。あんまり、(氣を入れて)お父ちゃん蛙が元氣よくあすわりしたのでね。葉っぱが、破れて皆大さわぎをしてお池に落ちこんぢやつたの。大いそぎ／＼で向ふの葉っぱの上にお行儀よくあすわりしたの。

「まあ、面白かつたわね。」

といつて皆んなで笑つたの。

このお池は、どこのお池、王様のお池なの。王様が、あははとお笑ひになつたの。

今度は、お父ちゃん蛙もお母ちゃん蛙も、お兄ちゃん蛙も、おちやん蛙も、ちよこんとおじぎをして、皆で一しよに、あははは」と笑つたの。

あかしいわね、おほほほほ、おしまひ。

注 意

(最も、幼児のよるこぶ語、繰返へされる言葉の、音の高さ、長さをよく加減すること)

おぢいさんは、たつた一人のひとりぼつちなのです。お山に柴刈に行くのも一人、町にお買物に行くのも一人、御飯の時も一人、お掃除をするのも一人なのです。おばあさんもなければ、子供もありません。面白い時に一しよに笑ふお友達もありません。ほんとは、ひとりぼつちのさびしいことです。

ところが、ある時、この一人ぼつちのおぢいさんのお家に、鳩が一羽あはてて飛込んで来て、「あゝ助けて下さい。おぢいさん。おぢいさん。大變なんです。私は大怪我をさせられました。そして、見つかると殺されるのです。ねえ、おぢいさん。おぢいさん。」といひました。

おぢいさんは、そつと、鳩を抱上げて身體をしらべて見ますと、大怪我をして兩方の羽がぶらぶ

らになつてゐました。血はまだく出ぬますし、これでは飛んで行けさうにはありません。おぢいさんは、お薬をもつてゐませんでしたので、きれいな水で、きづ口をあらつておぢいさんの懷ろに入れてやりました。鳩はよろこんで何度も御禮をいひました。

「おぢいさん。いまに獵師が来るでせうから、その時は、この卵を私の代りにやつて下さい。これは私の卵ではないのです。もらつた卵なのです。」と頼みました。卵は、鳩の卵よりはずつと大きくつて、色は綺麗なくく卵でした。お爺さんがほしい程立派な卵でした。

やがて、獵師がやつて来て、鳩をよこせ。ここへ逃げ込んだに違ひない。出さないとひどい目にあはせるぞ。」とおどしました。

おぢいさんは、鳩が可愛想ですから、綺麗な卵を出して、渡して「この立派な卵をあげるから、

あの鳩は許して呉れ。」と頼みました。獵師は、喜んで、一度は許すといひましたが、あの様なきれいな卵をあつた鳩が産むのだと思ひましたので、あの鳩がほしくなりました。そして無理に鳩を呉れといひました。

「ぢや、その卵をあげたことは何の益にもたぬことになる。その上、この鳩がその卵を産んだのではない。」

獵師はどうしてもきゝ入れません。

「おれは、この卵一つより、これを産むその鳩がほしいんだ。」

といつて、惜しげもなく卵を下に投げました。卵は、ぱちつと大きな音で割れますと、中から、大きな蛇が出て來ました。そして、驚いてゐる獵師を目懸て飛かりました。恐しさにふるへ乍ら大ごゑをあげて獵師はどこまでも蛇に追れて逃げて行きました。蛇は追つかけて行つてそれつきり

戻つては來ませんでした。

おぢいさんが蛇の出たあとを見ると、前と同じ大きな卵が九つ出來てゐました。皆どれも綺麗でしたが、おぢいさんは、それがちつとも欲しくはありませんでした。

暫くすると、獵師は大勢の仲間を連れて、蛇退治とお爺さんを殺す考へてやつて來ました。

おぢいさんは、命をとられる事と思つてゐますと、九つの卵が、ひとりでに、ぼん／＼、ぼん／＼が出て來ました。九ひきの大蛇はどこまでも／＼獵師たちを追かつて行つたのでせう。歸つては來ませんでした。大蛇が出たあとには、九十九の大きな卵が綺麗にぴか／＼光りながら集まつてゐました。が、おぢいさんはちつともほしいとは思ひませんでした。おぢいさんは、

「さあ／＼。卵よ。あまへ達は、わるさわざをす

るから、おぢいさんは、氣味がわる／＼つてしやうがない。しばらくお前達の氣の落つくまで、ねむらせてあげやう。」

といつて、大きな穴を掘て、その中にやはらい薬を一面に敷くと、一つづゝの卵が腹を立て割ぬやうに、そうつと／＼穴につき重ねて囊をかぶせました。その上にどん／＼土をかけてすつかり埋めてしまひました。

その時に小さい可愛い金色の卵が一つあつたのも一しよに入れてしまひました。

鳩は、惜しさうに、

「まあ、おぢいさんあの金色の卵も埋めたのですか。あれは、おぢいさん、大事な卵でしたのに。」

といひました。しかし、おぢいさんは、もう一度あの蛇の卵を掘りだして、金の卵をその中から取るのはいやでした。

翌日、卵を埋めた土の中からピヨ／＼、ピヨ

「と、ひよこの鳴く聲がします。その次の日、卵を埋めた土の中から、ビョ〜、ビョ〜とひよこの聲がはつきりします。その次の日、卵を埋めた土を、ポコ〜、ポコ〜と動かし乍ら、ビョ〜、ビョ〜とひよこの可愛い聲がします。おぢいさんははじめて気がついてしばらく、じつと聞いてゐました。するとその聲はだん〜綺麗な聲にきこえて、ますます可愛い鳴き方になりました。」

「あゝ、かはいい聲だ、外に出いのだらう。目がさめたのなら、出してあげるよ。(ビョ〜、ビョ〜)〜可愛い〜。」

と、土をすこしのけると、かはいい、ピカ〜光る金のひよこが、出て来て、身體の土をぶる〜つとふるひました。

「あゝ、かはいい。あゝ、よい聲だ。」

と、よろこびました。おぢいさんは、あまり珍

らしいので王さまにさし上げました。王さまは大變よろこびになつて、ごほうびを澤山下さいました。そして、「この鳥はどこで生れたか」とお尋ねになりました。

「はい、私の家の前の土の中から生れました。」

王様は「おかしな事をいふとしよりだ。」とお考へになりましたが、

「まだ、あるだらう、皆もつてまわれ。御ほうびはどれだけでものぞみ次第だ。」

と、仰いました。

おぢいさんは、お家へかへると鳩と一しよに、王様に頂いた御褒美を見てゐました。すると、

「おぢいさんと、一しよぢやないといやあだ。おぢいさんと、一しよでないといやあだ。」

と、泣いて来るものがあります。おぢいさんが見ますと、あの可愛い金のひよこが、泣ながら、よちよち〜歸つて來ました。ひよこは、籠から出てかへ

つて来たのでした。

おちいさんは、ひよこをつれて、王様の御殿にもつてまゐりました。

「ひよこが、歸つて来ましたので、つれてまゐりました。」

と申し上げました。

王様は、鳥籠から出てかへつたひよことは思ひませんでした。それで、「妙なことをいふとしよるだ」とお考へになつて、前と別に御褒美をもたせてかへしました。

◇……

そのあとから、金のひよこは「おちいさんと一しよぢやないといやあだ。」と泣いて歸つて来ました。

おちいさんはその次の日、鳩をお留守番においで、ひよこをつれてまた王様のところへまゐりました。

「ひよこが歸つて来ましたので、つれてまゐりました。」

そして、御褒美を頂きました。こんなにもらつたらおちいさんのお家は御褒美で一ぱいになつてしまひます。

「おちいさんと一しよでないといやあだ。」

と、可愛い聲で、綺麗なひよこが、小さい口をあけて泣きますので、おちいさんも歸る事が出来ません。王様も「此の小さいひよこを一人ぼつちにするのは可愛相だとお考へになつて、「どうしたらよいか」お困りになりました。そのうちにふとお氣づきになりました。

「よし、おちいさんも、この御殿にこの鳥と一しよに居るがよい。」

「王様、私には、まだお供があります。」

「誰か、おばあさんか」

「いえ、鳩が一羽ゐます」

「鳩も一しよでよい〜。」
と、王様はおゆるしになりましたので鳩も御殿で暮せるやうになりました。

◇……

王様の御側には、大變慾の深い家來がゐりました。「おぢいさんのぬ間に、王様に頂いた御褒美を取り、又、家の前の土の中の澤山なひよこをとつてやらう。いそげ〜。」御褒美はのぞみ次第だ。」と、手下の者を何百人もつれて行きました。

大勢はまづ、卵を埋めてある土を掘かへし〜して藁まぐでほつてきました。藁をのけると、九十丸の卵は久々で明るいところへ出ましたので綺麗に光つてゐました。慾の深い家來は大よろこびによろこびましたが、卵がぼんとわれると大きな蛇が出て來ましたので、驚いたも驚かないもありはしません。ぼん〜、ぼん〜、九十九の卵がわられてしまはない間に、慾深の家來も何百人の手下

も、あちこちに逃げまどひました。そして、九ひきの大蛇は、追ひまはし〜て、家來も手下も蛇もそれつきり姿は見えませんでした。

王様の御殿では、大怪我をした鳩もすつかり元氣になつて、朝から、御殿で「王様 お早う、王様お早う」と鳴きました。ひよこは、まだ 子供ですから、こんなにおぢいさんと一しよにゐても、「おぢいさんと一しよでないといやあだ。」とうれしさに昔の通りに鳴いてゐました。

おぢいさんは、これからは、たつた一人のひとりぼつちでなくなつて、面白い事をいつて笑ふお友達が澤山できました。おぢいさんは、あははと笑つたでせうか。おほ〜とわらつたでせうかね。おしまひ。

—昭和五年六月二十八日作—

注 意

一、◇……から◇……は省いて話してもよいところです。
二、「おぢいさんと一しよでないといやあだ」は省いて話し

てもよい。

お菓子と蟻

座敷の庭に、お菓子のほんとに小さいかけらが落ちてゐましたの。

蟻のおぢさんが、それを見つけて、そつとほつて見ました。

「ウン、これはたしかに、うまさうだ。」

それから、そつとなめて見ました。

「ウン、これはすてきにあまいぞ。」

それから、おぢさんはそのお菓子の上のつかつて、その大きさを調べてみました。すると、蟻のおぢさんよりずつとく大きいのです。

「オ、これはずるぶん、大きいな。」

それから、せめて轉してでも歸らうと、おぢさんは、力を入れて「ウンと押せ」「ウンと押せ」と

やつて見ましたがピリツとも動きません。

「これや、ひとりでは大變だ、皆を呼んで來やう。」

と、いつて大いそぎくゞで御殿に知らせにかへりました。すると、一番に、お菓子のところにまで大いそぎに來たのは蟻の子供等でした。お菓子を見てびつくりしました。

「おぢさんのいつたのはこれだね。」

「うまさうだな。たべられるかしら。(なめて見る) うまいくゞ。すてきだな。」

「うまいかい。(なめて見る)。やあ、あまいね。」

「うれしいなア。僕等だけで食べやうよ。」

「僕たちだけでたべやうよ。」

蟻のおぢさんは、

「これ、お前たちは、一人でたべるのぢやないんだよ。一人で見つけてもみんなのものなのだ。」